

今福龍太

南へ、心へ  
〈群島-世界〉への誘い

高橋源一郎

旅の文学史

平岩弓枝

江戸の旅

池内紀

私の旅行術

荒川洋治

旅のことば

西村京太郎

トラベル・ミステリー

十川信介

汽車の明暗

川本三郎

清張作品と旅

桐野夏生

林芙美子と南方

# 旅のかたち、 旅する心

第十四回 日本近代文学館夏の文学教室

2009年7月27日(月)

～8月1日(土)

午後1時～4時20分

有楽町・よみうりホール

主催 財団法人 日本近代文学館

後援 読売新聞社 協力 小学館

佐佐木幸綱

牧水の旅

アーサー・ビナード

ゆけばほどなく着きにけり

椎名誠

役に立つ話 そうでもない話

藤田宜永

旅の余話—取材と作家

島田雅彦

旅の日本史

吉増剛造

旅のアイランド—新作シネと

辻原登

歴史と冒険のシンクロニシティ—  
—「天の原」歌をめぐって—

北村薫

〈対談〉山のあなた

桜庭一樹

7月27日(月)

佐佐木幸綱 (ささきゆきつな) 牧水の旅

1938年東京生まれ。歌人。早稲田大学国文科卒。佐佐木家は弘綱、信綱、治綱と続く国文学者・歌人の家系。青年期はラグビーやボクシングに熱中。59年、父治綱の急逝を機に作歌を始める。63年、現代短歌シンポジウム提出作品「俺の子供が欲しいなんて言ってたくせに！馬鹿野郎！」が話題となる。肉体感覚をダイナミックに詠む作風は「男歌」と称された。71年、第一歌集『群黎』で現代歌人協会賞、98年『旅人』で若山牧水賞など数々の賞を受賞、08年、芸術院会員となる。俵万智らをはじめとする後進の指導にも努める。

アーサー・ビナード (Arthur Binard) ゆけばほどなく着きにけり

1967年米国ミシガン州生まれ。詩人。ニューヨーク州のコルゲート大学で英米文学を学び、卒業と同時に来日、日本語での詩作を始める。2001年に詩集『釣り上げては』で中原中也賞、05年に『日本語ぼこりぼこり』で講談社エッセイ賞、07年に『ここが家だ—ベン・シャーン』の第五福竜丸』で日本絵本賞、08年には『左右の安全』で山本健吉賞を受賞。文化放送と青森放送でラジオパーソナリティをつとめる。日々、愛用の自転車で東京をまたにかけ、すぐそこにある旅を語る。

椎名誠(しいなまこと) 役に立つ話 そうでもない話

1944年東京生まれ。79年より、小説、エッセイ、ルポなどの作家活動に入る。これまでの主な作品は、『犬の系譜』『岳物語』『アド・バード』『中国の鳥人』『黄金時代』など。近著は、『すすれ！麴の甲子園』『十五少年漂流記』への旅』『大きな約束(正・続)』がある。エッセイは、週刊文春連載中の赤マントシリーズが18年ほど続いている。旅の本も多く、モンゴルやバタゴニア、シベリアなどへの探検、冒険ものなどがあり、現在も世界中を旅し続けている氏の話から、さまざまな世界に触れる。

7月28日(火)

藤田宜永(ふじたよしなが) 旅の余話—取材と作家

1950年福井生まれ。作家。66年に早大高等学院進学のため上京。早稲田大学中退後、渡仏しエール・フランスに勤務。80年に帰国。86年に『野望のラビリンス』で小説デビュー。95年『鋼鉄の騎士』で日本推理作家協会賞、99年『求愛』で島清恋愛文学賞、2001年『愛の領分』で直木賞受賞。作家は作品の舞台である土地・場所に行ったことがなくても、それを描き切るだけの想像力をもたなければならないが持論。では、作家にとって取材の旅とはなになのか。作品に与える影響は？ 取材旅行の体験をとおして語る。

島田雅彦(しまだまさひこ) 旅の日本史

1961年東京に生まれ、川崎で育つ。作家、法政大学教授。東京外国語大学ロシア語学科在学中の83年『優しいサヨクのための嬉遊曲』でデビュー。84年『夢遊王国のための音楽』で野間文芸新人賞、92年『彼岸先生』で泉鏡花文学賞、2006年『退廃姉妹』で伊藤整文学賞、08年『カオスの娘』で芸術選奨文部科学大臣賞受賞。08年度は大学のサバティカルでニューヨークに滞在。09年刊の『徒然王子』では2000年間の時空を転生を繰り返しながら旅する王子を描いた。

吉増剛造(よしまつごうぞう) 旅のアイランド—新作シネと

1939年東京市(現・杉並区)阿佐ヶ谷生まれ。詩人。慶應義塾大学国文科卒業。在学中から詩作活動を開始し、先鋭的な詩人として国内外で高い評価を受けている。『黄金詩篇』(高見順賞)、『螺旋歌』(詩歌文学館賞)など著作多数。2008年『表紙 omote-gami』で毎日芸術賞を受賞。朗読、銅版制作、多重露光写真、gozoCineなど、既存の在り方にとらわれない独自の創作活動を展開している。今年の春先、氏は、再び、ケルト文化の記憶が色濃く残る、アイランドの地を踏んだ。まるでなにかの声に呼ばれるかのように旅をした、その時間を、撮りおろしのシネとともに語る。

7月29日(水)

辻原登(つじはらのぼる) 歴史と冒険のシンクロニシティ―「天<sup>あま</sup>の原<sup>はら</sup>」歌をめぐる―

1945年和歌山県生まれ。作家。中国貿易の商社に勤めながら小説の発表を始め、90年『村の名前』で芥川賞を受賞。99年『翔べ麒麟』で読売文学賞、00年『遊動亭円木』で谷崎潤一郎賞、05年『枯葉の中の青い炎』で川端康成文学賞、06年『花はさくら木』で大仏次郎賞を受賞。09年6月、毎日新聞に1年半超にわたって連載した大長編『許されざる者』を刊行。中国を舞台とした作品を数多く手がけている氏が、過去・現在・未来の中国への旅を語る。

対談 山のあなた 北村薫 × 桜庭一樹

”山のあなたの空遠く「幸(さいわい)住むと人のいふ”―「山のあなた」は上田敏の訳詩集『海潮音』におさめられたカール・ブッセの詩。対談は、この言葉から、はたしてどこに向かうのだろうか。

北村薫(きたむら かおる)

1949年埼玉県生まれ。作家。早稲田大学卒業後、高校で教鞭を執るかたわら、89年「覆面作家」として『空飛ぶ馬』でデビュー。91年『夜の蟬』で日本推理作家協会賞受賞。〈円紫さんと私〉〈覆面作家〉〈時と人〉などのシリーズを発表。09年4月には『驚と雪』が刊行され、〈ベッキーさん〉シリーズが完結した。『謎のギャラリー』などのアンソロジー、『ミステリ12か月』『詩歌の待ち伏せ』などのエッセイにも腕を振るい〈本の達人〉としても知られる。

桜庭一樹(さくらば かずき)

1971年島根県生まれ。作家。99年ファミ通エンタテインメント大賞に佳作入選しデビュー。04年『砂糖菓子の弾丸は撃ちぬけない』がジャンルを超えて高く評価される。07年『赤朽葉家の伝説』で日本推理作家協会賞受賞。08年『私の男』で直木賞受賞。

7月30日(木)

十川信介(とがわしんすけ) 汽車の明暗

1936年北海道生まれ。学習院大学名誉教授、日本近代文学館副理事長。京大で中村光夫に師事。71年『二葉亭四迷論』を刊行、81年『島崎藤村』で亀井勝一郎賞受賞。『二葉亭四迷全集』『紅葉全集』『新日本古典文学大系 明治篇』などの編集に携わる。近著に『明治文学 ことばの位相』『近代日本文学案内』。「明治以降のもっとも代表的な交通機関である汽車についてお話しします。汽車旅行を扱った文学作品は数多くありますが、今回は夏目漱石、内田百閒、萩原朔太郎、横光利一らを中心に、その明と暗の部分を取り上げる予定です。」とのこと。

川本三郎(かわもとさぶろう) 清張文学と旅

1944年東京生まれ。文芸評論家。東京大学を卒業後、朝日新聞記者を経て、文筆生活へ。91年『大正幻影』でサントリー学芸賞、97年『荷風と東京「断腸亭日乗」私註』で読売文学賞・評論・伝記賞、2003年『林芙美子の昭和』で毎日出版文化賞と桑原武夫学芸賞受賞。映画に関する造詣も深く、街歩きの達人でもある。今年生誕100年を迎えた松本清張の作品の多くは『点と線』以来、旅が重要なモチーフの一つになっている。では、清張文学にとって旅はどんな意味をもち、どんな役割をになっているのだろうか。

桐野夏生(きりのなつお) 林芙美子と南方 インタビュアー 鶴飼哲夫(読売新聞記者)

1951年金沢生まれ。作家。成蹊大学卒。93年『顔に振りかかる雨』で江戸川乱歩賞、98年『OUT』で日本推理作家協会賞、99年『柔らかな頬』で直木賞、2003年『グロテスク』で泉鏡花文学賞、04年『残虐記』で柴田錬三郎賞、05年『魂萌え!』で婦人公論文芸賞、08年『東京島』で谷崎潤一郎賞受賞。04年には『OUT』がエドガー賞最優秀作品賞にノミネートされた。現在「週刊新潮」に連載中の『ナニカアル』は林芙美子が主人公。1942年の報道班員としての南方従軍中、彼女になにがあったのか、作家の想像力がその真実に迫る。

7月31日(金)

池内紀(いけうちおさむ) 私の旅行術

1940年兵庫県姫路市生まれ。ドイツ文学者、エッセイスト。執筆範囲は多岐に渡り、数多くの著訳書を手掛ける。著書では、94年に『海山のあいだ』で講談社エッセイ賞、2001年に『ゲーテさんこんばんは』で桑原武夫賞を受賞、訳書では、99年にゲーテ『ファウスト』で毎日出版文化賞、00-02年に『カフカ小説全集』で日本翻訳文化賞を受賞。旅行記や、大好きな温泉めぐりをつづったエッセイなど、海外、国内を問わず、旅をして、書きつづけてきた氏が、自身の旅行術を語る。

荒川洋治(あらかわようじ) 旅のことば

1949年福井県三国生まれ。現代詩作家。71年に刊行した詩集『娼婦論』で早稲田大学在学中の学生を対象とした小野梓記念賞を受賞しデビュー。76年『水駅』でH氏賞、98年『渡世』で高見順賞、2000年『空中の茱萸』で読売文学賞、04年『忘れられる過去』で講談社エッセイ賞、06年『心理』で萩原朔太郎賞、『文芸時評という感想』で小林秀雄賞受賞。詩集出版の紫陽社を主宰し、多くの新鋭詩人を世に送り出してもいる。当代屈指の「ことば」の専門家である氏はどんな「旅のことば」を紹介してくれるのだろうか。

西村京太郎(にしむらきょうたろう) トラベル・ミステリー インタビュアー 津田令子(トラベルキャスター)

1930年東京生まれ。作家。府立電気工業学校(現・都立工業高専)卒業後、各種の職業を転々とする。63年『歪んだ朝』でオール読物推理小説新人賞を受けてデビュー、65年『天使の傷痕』で江戸川乱歩賞受賞。『寝台特急(ブルトレイン)殺人事件』(78年)や『終着駅(ターミナル)殺人事件』(80年日本推理作家協会賞)を発表して「トラベル・ミステリー」を開拓、これらで事件を解決する名コンビ、十津川警部と亀井刑事のシリーズは250冊を超える。01年、湯河原に西村京太郎記念館がオープン、原稿、鉄道ジオラマなど展示。

8月1日(土)

今福龍太(いまふくりゅうた) 南へ、心へ 〈群島-世界〉への誘い

1955年東京生まれ。文化人類学者・批評家。東京外国語大学大学院教授。2002年より遊動型の野外学舎である奄美自由大学を主宰。著書に『クレオール主義』(ちくま学芸文庫)、『荒野のロマネスク』『ミニマ・グラシア 歴史と希求』『群島-世界論』(いずれも岩波書店)、『サンパウロへのサウダージ』(レヴィ=ストロースとの共著、みすず書房)、『ブラジルから遠く離れて 1935-2000』(サウダージ・ブックスとの共編著、港の人)など多数。群島の風に誘われてブラジル、カリブ海、奄美をたどる、古くかつ新しい精神の旅。

高橋源一郎(たかはしげんいちろう) 旅の文学史

1951年尾道生まれ。作家、明治学院大学教授。灘中・灘高を経て横浜国立大学に進むも、学生運動に参加し除籍退学。肉体労働に従事。81年『さようなら、ギャングたち』が群像新人長編小説優秀作となりデビュー。88年『優雅で感傷的な日本野球』で三島由紀夫賞、2002年『日本文学盛衰史』で伊藤整文学賞を受賞。日本近代文学史を高橋流においしく料理した氏が、今度は「旅」というフィルターをとおして、文学史をどのように料理してくれるのだろうか。

平岩弓枝(ひらいわゆみえ) 江戸の旅

1932年代々木八幡宮の一人娘として東京に生まれる。作家。日本女子大学国文科卒。戸川幸夫、長谷川伸に師事。59年『塾師(たねがし)』で直木賞受賞。73年『御宿かわせみ』連載が始まる。江戸の風物、人情を豊かに謳いあげて人気を博し、06年まで同シリーズを31巻刊行、以後、時代は明治に移り『新・御宿かわせみ』として現在も書き継がれている。シリーズでは『はやぶさ新八』もあり、98年菊池寛賞受賞。小説のほか放送劇、舞台劇の脚本も数多く、79年NHK放送文化賞受賞。また04年には文化功労者に選ばれた。